

元代江南知識人の動向と実像

于, 磊

<http://hdl.handle.net/2324/1398531>

出版情報 : Kyushu University, 2013, 博士 (文学) , 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



論文内容の要旨

本論文は、元代江南知識人の動向と実像を解明するために、彼らによるモンゴル朝廷の受容と、それに伴う彼らの理念の変容について考察するものである。

古くは、モンゴル朝廷治下における江南知識人は冷遇されていたという理解が一般的であったが、近年の研究の進展によって、そのようなイメージは払拭されつつある。ただし、近年の研究は、モンゴル朝廷の江南政策に主眼が置かれており、江南知識人に関する議論の多くも、彼らが新たな統治システムに対して、受動的な対応をとったとする視点からなされている。そこで、本論文は、江南知識人の主体的な対応や、それに伴う彼ら自身の理念の変容に焦点を当てて、彼らの動向と実像を考察する。そして、この考察によって、元代江南社会と江南知識人の意義を宋元明清時代の歴史展開の中に新たに位置づけ直すことが本論文の最終的な目的である。

第一章「元代江南知識人研究の課題」では、これまでの研究史を整理し、その課題と本論文の問題意識を提示する。第一に、宋元交替期の知識人の動向は、元代だけではなく、その後の明清時代の知識人の動向にも影響を与えているため、通時代的な視座から考察されるべき事象である。第二に、とりわけ研究蓄積の浅い元代中期にも注目し、江南知識人によるモンゴル朝廷の受容、朝廷の江南政策の影響、彼らの主体的な活動について検討することが不可欠である。第三に、「科挙社会」が十分に機能していなかった元代において、知識人がどのような影響を受け、どのような対応をとったのかという問題は、知識人の実像を解明する上で避けて通れない課題である。

第二章「地域社会の保全とその記憶」では、宋元交替期に徽州で勃発したモンゴル軍による屠城の危機、「徽州屠城危機」と呼ばれる事件を取り上げ、徽州の知識人が、自らの理念に基づいて主体的に行動し地域社会の保全に努めたことを論じる。元代中後期の江南知識人は、「徽州屠城危機」の回避に尽力した鄭安の祠廟の建立を推進する。この過程で、鄭安らは、地域社会の保全・維持を全うした理想的な先賢として改めて位置づけられた。また、地域社会における当該地域出身の先賢に対する祭祀は、往々にしてその地域における知の系譜を確認する営為と連動していた。彼らは、これらの事業を通じて、地域への帰属意識を構築しようとしていたのである。

第三章「「忒臣」像の創造と江南知識人の実像」では、モンゴル朝廷に帰順した方回という著名な人物を取り上げ、当時の江南知識人が「遺民」・「忒臣」に分断されていたという従来の説を再検討した。方回の交際関係を分析すると、「遺民」となった知識人も、非漢民族王朝の登場に対し、排撃や対立といった一貫して態度をとっていたわけではなかったことが窺える。さらに、元代前期から明末清初に至る「宋遺民録」の編纂・伝播状況を考察した結果、「遺民」・「忒臣」という二項対立が後世成立・普及したイメージであったことが確認された。つまり、清朝による知識人に対する厳しい文化統制の下、多くの「明遺民」は、清朝に対する不満を宋元交替期における「宋遺民」の感情に託し、彼

らを「武臣」と対置すべき存在として積極的に称揚していたのである。

第四章「職能化と儒・医関係から見た儒学理念の変容」では、儒学から医学へと転向する江南知識人の職能化という現象を取り上げる。従来、元代においては科挙が機能していなかったために、知識人がやむを得ず職能化の道を選択したという消極的なイメージが先行しがちであった。しかし、彼らが互いに儒学の理念を共有しつつ、医家として積極的に活動していたという側面に注目すると、それが彼らの主体的な選択であったことや、柔軟で寛容な理念を共有するようになった元代江南知識人の特質が明らかとなる。江南知識人にとっての科挙の停止と知識人の職能化という現象は、江南知識人の理念上の変容も促したのである。

第五章「「混一」王朝と忠節観念の系譜」では、江南知識人の理念の変容を促した、「混一」王朝としてのモンゴル朝廷に対する帰属意識の形成を検討する。彼らのモンゴル朝廷に対する帰属意識は、タンгут人余闕とその周辺の江南知識人の忠節観念をめぐる議論から窺える。その帰属意識は、元明交替期を経た後も、非漢民族であった余闕に対する祭祀・追憶が行われるという形で現れるのである。

以上の考察を通じて、儒学以外の理念の受容や非漢民族に対する開放的な態度などに見られる、元代江南知識人の理念の柔軟さ・寛容さが確認された。本論文では、これを「知識人の寛容性」と呼び、元代江南知識人の特徴として位置づける。このような江南知識人の寛容性は、南宋時代の知識人のそれとは大きく異なっている。そして、この特徴は、明清時代における商業活動の活発化による知識人の商業や商人に対する理念の変容にも大きな影響を与えることとなる。宋元明清時代の脈絡における元代江南社会は、決して宋・明間の過渡的な時代における一地域などではなく、明清時代のいわゆる「伝統社会」の形成を大きく規定した重大な要素なのである。